

## 本末關係の考察

——社會學的一二の問題に就て——

福 場 保 洲

### 一

わが禪門に於て宗派が如何なる契機によつて成立するかに就て、茲で詳しく述べる餘裕を有しないが、要するに祖師の獨自なる禪風舉揚——ある祖師が釋尊以來師資相承されて來た「正法眼藏涅槃妙心實相無相法門」を舉揚さるゝに當つて、極めて特色ある家風を以て行はれる場合、その家風が中心の契機となつて自然に又必然に宗派は成立するに至るのである①。而て本山は、祖師のかゝる禪風舉揚の本據とされた古道場である。故に、本山は、一派の法流の本源——法流々通の源泉であり、又廣く流通された法流の統一の中心である。今日の宗派は、法制的・政治的・經濟的意味内容を、有する教團として現れてゐるが、その本質的な意味内容を求むれば純宗教的なものであることは云ふまでもない。それは宗派成立の中心契機より必然的に生れて來るものである。

本山は法流の本源であるから、人がこの法流を正しく十分に汲み活潑々地にその法をはたらかし

てゐる場合、その人々に屬する大小の道場即ち大小の寺院はすべてこの本山に屬する末寺であると云はねばならない。而てこの本末關係をして眞に本末關係たらしむるものは正法の師承である。

さて、他宗派のことは暫く措き、わが禪門に於ては、由來、「師承一事最爲省要」②とされてゐる。「不得滅却吾正法眼藏」③と云ふ臨濟禪師の遺誡を永遠に眞に實踐して行かんとすれば、師承によるより外に道がないのである。「威音王已後無師自悟是天然外道」④なる語は、わが禪門に於ける正法の師承に對する態度を力強く表現するものである。而てこの正法の師承は師弟をして眞實に師弟たらしむる第一原理である。師弟が眞實に師弟となることは、兒孫が眞實に一派の開山に「日々相見」する境地に入ることであり、兒孫が開山に眞實に連繫することに外ならない。かくして、兒孫は眞實に開山の兒孫となり、兒孫の道場は末寺として開山の道場たる本山に屬することになる。

開山の法は諸の祖師によつて的々相承され師に及んでゐる。故に、師に就て開山の正法を正しく十分に汲むことによつて、開山と祖師及び師とは相續者に於て生きはたらいて居り、相續者は開山と祖師及び師に於て自己の生命の本質を見出だす。正法によつて生命と生命との相即相入が生れるのである。眞箇の生命相互の間に於て、實體と力用との鎔融交徹の關係が生れるのである。この關係は、開山祖師師及び相續者等の一體化換言すると宗派と云ふ教團の縦の一體化に外ならない。又

同一の正法を共に相續してゐる現在の人々は、その相續が眞實なる限りに於ては、同じ生命を共に自己の生命としてゐることによつて、相互の生命の相即相入を生み、現在の教團の横の一體化を實現さすのである。而て、縦の一體化と横の一體化とを齎らす者は同一の正法であるから、教團は、常に、過去の者と現在の者とが密接不可離に連繫して統一的全體をなしてゐると云はねばならない。

## 二

かゝる統一的全體をなしてゐる教團——宗派は如何なる構造を有するものと考えべきであらうか。同一の正法を共に眞實に相續せることによつて、現在の人々が横の關係に於て一體化してゐることは、現在の教團がそれ自體として統一的全體をなしてゐることに外ならない。人々は、自己自身と自己の周圍に於ける種々な特殊の條件によつて、夫々特殊な生活方向を持ちその實現に對する努力をなしてゐるのであるが、共に同一の正法の流を汲み同一の生命を自己の生活の核心となしてゐることによつて、かゝる特殊性も亦一契機となつて統一的全體を形成する。云ふまでもなく、一般に、人々個々の特殊な生活方向もそれ自體として、人々の強い連繫を齎らす上に於て重要な役割を演ずる。甲の特殊な生活方向は乙にとつて、乙の特殊な生活方向は甲にとつて、夫々必要な生活目的を成就するものであるが然しそれは自己に於て成就し得ざるものであるが爲に、他者の生活の成果を自己に受けて充足する。即ち廣義の協力が行はれるのである。かくして甲乙兩者の間に於け

る連繫が生み出される。然し、かゝる生活の成果の相互供給は、共通する生活上の根柢か或は目的か、存するに非れば、兩者をして接觸（心的交通）せしむる根本條件がないのであるから發現し得ざるものである。つまり、既に連繫されてゐる人々の間に於てのみ、かゝる事象は起るのである。この意味に於て、かゝる生活の成果の相互供給によつては、連繫が生み出されるのでなく強められると云ふのが正しいと云はねばならないことになる。而て、教團に於て、特殊性を有する甲乙兩者をして接觸せしめ廣義の協力を行はしめる根柢と目的との役目を演じてゐるものは正法である。正法と云ふ同一の生命を共に自己の生活の核心となしてゐるから、そこに共通の根柢があり、その正法を共に自己に於て深め且つ之を他者をして體驗せしめ行はしめようとするのであるから、こゝに共通の目的がある。かくして、甲乙兩者は、第一に正法と云ふ共通生命を有し、第二に唯この正法の故に行ふ所の狹義の協力を爲し、第三にかゝる第一及び第二の條件が存在することによつてのみ行はれ得る所の廣義の協力を爲す。是等の諸事情が契機となつて、甲と乙との間に——從て一般の教團人の間に具體的な現實的な連繫が生れ、教團の横の一體化——現在に於ける教團の統一的全體が齎らされる。

斯の如く教團の人々が正法を中心契機として統一的全體をなすと云ふことは、畢竟するに、本山を中心契機として末寺が統一的全體をなすと云ふことに外ならないことは殊更に論述するを要しな

いであらう。

さて、かゝる現在の教團がもつ所の特質は、同時に、過去の教團の特質でもある。即ち過去の諸教團も亦夫々統一的全體をなしてゐるのである。而て、現在の教團をして統一的全體たらしめてゐる中心の契機たる正法も、過去の教團をして統一的全體たらしめた所の中心契機たる正法も同一のものであるから、之によつて、現在の教團は過去の教團にかたく連繫してゐる。而て、この關係を過去を出發點として云へば、始源に於ける教團の正法があらゆる時代の教團を貫流して今日に及び、是等は結ばれてゐると云はねばならない。然しながら、貫流は高きより低きへ向ふ一本の線をなすのであるから、之によつて結ばれた者は直線的構造をなす。正法の貫流によつて生れる教團の直線的構造は、無限の彼方に向つて進む直線上に於ける個々の教團の連繫であつて、現在の教團と過去の教團との具體的な統一的全體としての相を十分に描き出さない缺點を有する。翻て思ふに、現在の教團は、之に先行する教團に接しつなぐると共に、始源に於ける教團にも接しつなぐる者である。何故者、それ等に於て生きはたらいてゐる正法は同一のものであるからである。而て、各々の教團は夫々歴史的個性を有するから、現在の教團は、先行する教團や始源に於ける教團に接しつなかりつゝ而も之に重なるのではない。現在の教團が之に先行する教團や始源に於ける教團に重ならないで接しつなぐ状態は、之を圖型的に表現すれば、圓環による連繫をなしてゐる状態に外な

らない。つまり、現在の教團をして統一的全體たらしめてゐる正法が、始源に於ける正法に直接に復歸せる型がこの圖型であると云ひ得る。而て、前者が後者に復歸することは、兩者が同一の正法であることによつて可能であり又必然的である。而も、正法は始源に始まつて生き流れてゐるのであるから、始源への復歸は圓環的に流れて行つて始めて可能である。直線的流れを以てしては不可能である。故に、圓環的圖型は作爲によつて生れるのではなく自然に生れるのである。かくして、過去の教團と現在の教團との統一的全體としての構造は、直線によつてつながれた型態をなすのでなくして、圓環によつてつながれた型態をなすと云はねばならない。而て、圓環的な型態にして始めて、眞實の統一的全體の相を明に眼前に描き出すのであり、而もこの型態をなすものこそ眞の統一的全體であると云ひ得ると思ふ。

## 三

宗派と云ふ教團は開山の特色ある家風が中心契機となつて成立するのであるが、開山のこの家風とても佛即ち釋尊が宣揚された正法をその本質的内容とするものであることは云ふまでもない。換言すると開山の正法も釋尊の正法もその本質に於ては同一のものである。「佛々授手祖々相傳」と云ふ古人の語はこの間の消息を物語る。「正法眼藏辨道話」に云ふ所の「諸佛如來、ともに妙法を單傳して、阿耨菩提を證するに、最上無爲の妙術あり、これたゞ、ほとけ佛にさづけて、よこしま

なることなきはすなはち、自受用三昧、その標準なり」⑤と云ふのも亦、同一の消息を物語るものである。即ち、兒孫が眞に師承を得れば、兒孫は佛及び祖師に連繫し又そのまゝ佛となり祖師となる。「はとけ佛にさづけ」、佛祖師に授け、祖師兒孫に授けるのであるから、兒孫の師承は佛や祖師よりの正法を相承せることに外ならない。兒孫は、西天の四七東土の二三を経て今日に傳へられたる無上の妙法を、師に就て修證することによつて相承する。而て兒孫は佛となり祖師となる。思へば、かゝる妙法修證の道を傳へられたる佛や祖師の「恩力」こそは、實に偉大なりと云はねばならない。而も、この恩力は、常に吾等兒孫が之に浴するのみならず、所謂衆生一般にさへ及んでゐるのである。「佛日眞照禪師語錄」に云ふ。「吾家正法眼藏元來八面玲瓏恁々焉而打開萬象上昭々乎而秘在一塵中所以大迦葉以破顏微笑新受付屬老黃面以金口玉音直爲流通四七二三天下老和尚在這裏攬入天魚布大教網三賢十聖恒沙諸如來在這裏架龜毛箭張兎角弓以至乾坤大地草木人畜皆憑此恩力無不現形容。」⑥

正法が釋尊より綿々不斷に傳承されて今日に及んでゐるとすれば、現實の問題として、宗派は國境を超越してゐるものであると云ふ結論に達するやに思はれる。もつと具體的に云へば、日本禪宗の諸宗派は、日本の寺院のみならず、日本以外の國家の寺院をも包含する教團であると云ふ結論に達するやに思はれる。然し、この結論は、國家と云ふ社會の歴史的規定から生れる宗派の特殊性の

無視から導かれるものであることは云ふまでもない。

一般に、國家の共同社會的特性を成立せしめる根本原因として、民族的生命つまり血のつながりと土地的條件及び民族精神をあげることが出来る。土地的條件の主要なるものは、自然の恩恵と地域から生れる民族の物的・心的交通の限定とである。この血のつながりと土地的條件とを地盤として、独自の民族精神が生れ又發展する。この三つのものが力強く作用する所には共同社會的特性が顯著に現れる。而て、吾々は、かゝる共同社會的特性を有する國家の典型たる祖國日本をもつことを誇とする。

わが宗派は、わが祖國日本と云ふ土壤の中から生れ又その上に於て發展したのであるから、日本の特性を有することは必然的である。開山は極めて特色ある宗風を舉揚されたのであるが、この特色ある宗風の舉揚こそ宗派の日本の特性の根柢をなすものである。然らばこの特色ある宗風の舉揚は如何にして可能であつたか。「日本精神」はわが國家の最高の理念であり、わが民族精神が發展に發展を重ねて之に近きつゝあるものである。正法はこの日本精神にその本質に於て毫も矛盾する所がない。興禪と護國とは完全に一致する。茲に開山が正法を舉揚されそれがそのまゝ日本の特性の發揮となり得た根柢があるのである。かくして、吾々の教團の場合に於ては（他の教團に於ても同様であらうと思ふが）、教團人に嚴然たる國籍があると同時に教團それ自體にも嚴然たる國籍があ



ると云はねばならない。而て、印度や支那の佛や祖師は吾々の教團に於ても生きはたらいてゐるのであるが、それは正法が日本精神と毫も矛盾せざるが爲である。故に、佛や祖師は、印度や支那の教團に於て生きはたらいてゐるとすれば、それらの教團の佛であり祖師でありながら、同時に吾々の教團の佛であり祖師であり得ることになる。此の立言は、言葉の上に於ては矛盾するものを有するが、内容的には決して矛盾するものを有しない。斯の如き關係は、恐らく、あらゆる文化の世界に大なり小なり現れてゐるものであらう。

#### 四

凡そ如何なる宗派にも教權が存する。わが禪門の宗派に於ても勿論そうである。教權の本質は、私見によれば、宗教上の權威であつて權力ではない。現代の諸宗派にはある意味での刑罰權が存する。この一事のみから云ふても、今日の教權は權力化してゐる。(固よりこの刑罰權は現代になつて生れたものでなく古くから存する。又教權の權力化の問題はこの角度からのみ見るべきものでないがその考察は他日に譲る)。一般に、團體生活が行はれる場合、ある程度の刑罰組織が早晚生れることは避け難いことである。故に教權が權力化することも亦避け難いことであらう。然し、「宗教的な人間が彼の本性によつて根抵づけられ止むに止まれず語るならば、彼に聽者が集まる」⑦所以もかゝる本性に在るのである。人は宗教を求め従て師を求める。教團は、人が止むに止まれず正

法を求め師を求むることによつて、自然に成立するものである。故に、教團は、本來から云へば、その存立上刑罰を要請するものでなく、従て權力を要請するものではない。のみならず、正法は、權力を俟たないで正法であり、それ自體として正法である。故に正法も亦權力を要請するものではないことは云ふまでもない。かくして、純粹に宗教的なものには、權力としての教權が生れ出づる可能性がない。

かくして、正法によつて、權力は約束されてゐないが、權威は約束されてゐる。正法は、宗教の究極の内容を以てその内容とするものであるから、絶對的なものである。故に之に對立する宗教的内容の存在を許さない。従て正法は本來絶對的な權威を約束してゐる。而も、この正法は、佛祖師開山等の體驗によつて見出だされ傳承され、兒孫は之を師承によつて自己のものとなすものであるから、正法によつて約束されてゐる權威は現實的なものとなつて来る。而て、本山は開山の古道場であり法流の本源であるから、自然に本山は權威の主體となつて来る。本山が、その名に於て眞實は開山の名に於て、末寺に對して正法を規準とする態度と行爲とを要求し得る根據は、それが、ある意味での權威の主體となつてゐる所に在ると見ねばならない。

一般に、權威は、個人よりも高い他者の意志であつて、外部から強力を以て個人を律するものであるとされてゐる。此説はロック以來多くの人によつて用ひられてゐるものであるが、吾々は社會

學者の中に於て宗教的權威に關するかゝる學說の典型的なものを見出だす。それは彼の社會實在論者たるデユルケームの學說である。彼は、「社會的諸信念や諸慣行は、外部から我々に作用する」と云ふ一般的立言を敷衍して、「宗教生活上の諸々の信仰や儀式は、信者が生れると共にそれ等の事實を見出だす」⑧ものであると云ふてゐる。即ち、彼に於ては、信仰や宗教的儀式は信者としての個人以前に存在し、從て彼に對して外部から強力を以てその信奉と實行とを求むるのである。如何なる社會的なものも、一旦それが成立するや、それをして存在するに至らしめた諸條件を離れて自立化するに至る傾向がある。然るに、自立的に存在する様になると、それはそれ自體として作用を發揮する様になる。この意味に於てデユルケームの右の主張は必ずしも否定すべきものとは考へられない。然し、一般社會的な權威にせよ宗教的な權威にせよ、それが力を發揮せんが爲には、彼自身も認めてゐる様に、「個人が彼を支配する力の存在を認識し且つその前に自己を屈する」⑨様にならねばならない。止むを得ざるに出づるにせよ或はその價值を認識して行ふにせよ、個人が自我的なものを捨てることによつて始めて、權威はその力を發揮するに至る。而て個人が自我的なものを捨てる場合に於て、それが自主的に自由に信念を以て行はれることが望ましいことは云ふまでもないであらう。コントは、「世俗的な權力は、究極は、或る物的優越即ち權力或は富力に依存する、而てその必然的な力は屢々止むを得ず従はれるものである、然るに之に反して、精神的權威

は、より溫順なより内的な信賴に基くものであり、常に知的な又道德的な優越性に自然に調和する信賴に基礎を置く」⑩と云ふてゐる。大に味ふべきものがあると思ふ。

正法の約束する權威が現實化し本山が權威の主體となつて來ると、この權威は恰も末寺に對して外部より威力を以てせまるものがあるかの如くに見ゆる。ひいては、本山は末寺に對して對立的な或るものを有するかの如き感を與へる場合がある。然し、正法、正法より生れ出づる權威、又その主體としての本山に關する限り、此は錯誤感より生れ出づるものであることは云ふまでもない。

前述の如くに、宗派は圓環的構造を有する統一的全體をなしてゐる。故に、宗派は一種の有機的構造を有する者と云ひ得る。正法の機能によつて、有機的な密接な連繫が本寺と末寺との間に存し又末寺相互間に存し、以て、宗派の構造をして有機的ならしめるのである。固より如何なる社會も生物學的な意味に於ける有機體ではないが、そのことは暫く措き、宗派は、之に於て正法が活潑々に作用してゐる限り、機能的有機體となつてゐるのである。而て、かゝる意味での有機體に於ては、末寺に對する本山と云ふ意識本山に對する末寺と云ふ意識は作用する餘地がない。意識されるものは全體として一派であり、全體の中に於ける本山であり末寺である。全體を離れては本山も末寺も有り得ないのである。「すべての個々のものを全體の一部分として、すべての有限なものを無限なものゝ表現として受け容れること、これこそ宗教である」⑪と云ふシュライエルマツヘルの

宗教觀は、そのまゝ本末觀に移して吾々の態度となし得よう。又この態度は極めて自然な又必然的な態度であるのである。有機體的な統一的全體としての宗派の自覺——究極に於ては正法の自覺——こそ權威の自覺に外ならない。而て、この自覺は、自然に本寺と末寺との關係を規定する。トレルチは云ふてゐる。「有機的統一感は權威感に變化する。而て、この權威感は正しき權威によつて全體の價値に對する諸の個人の關與を規定する」<sup>(12)</sup>。

斯の如く考へて來ると、權威は末寺にとつて外在的に存在するものでない。本山が強制するが故に存在するが如きものでもない。本山も末寺も、宗派全體の生命としての正法を共に有するものである。從て、正法に對する自覺が存する限りは、宗派は自ら統一される運命に在る筈である。然るに、かゝる意味に於ける權威は、今日の宗派に於て如何なる狀態に在るであらうか。ロツスの「宗教の法律的な側面が前進し神秘的な靈感的な側面が後退する」<sup>(13)</sup>と云ふ傾向が、吾々の國のすべての宗派に於て見られるのは、何故であらうか？

附記。本論は、最近（五月十五日——二十七日）教學新聞の求めによつて書いた本論と同題の拙稿に於て、詳しく考察しなかつた重要な一二の問題に就ての試論です。そして正法と云ふ立場から宗派と云ふ教團の特性云はゞ宗派の理念型（idealtypus）的な相を考察したのです。この宗派の内部關係たる本末關係には、茲で取扱つた外に少からぬ問題が在ることは云ふまでもありません。

又本論は時日不足の爲に、構想に於ても文章に於ても杜撰なものであるので他日に期する次第です。尙右の教學新聞所載の拙論の併讀を得ば幸です。(六月十四日夜)

①「密教研究」第五十二號五十五號所載拙論「宗派の統一と分裂」參照

②「宗門無盡燈論」下四丁に云ふ。「師承之事最爲省要……知些子向上宗旨於是投誠參決終有師承荷負法恩造次不忘是謂法嗣從上祖師的々相承皆如是。」

③「臨濟錄」の「行錄」に云ふ。「師臨遷化時據坐云吾滅後不得滅却吾正法眼藏」。「正宗贊」にも同様の語がある。云ふまでもなくかうした遺誠は各祖師の語錄に見出たさるゝものである。

④「無盡燈論」下四丁に云ふ。「策云仁者得法師誰曰我……於維摩經悟佛心宗未有證明者策云威音王已前即得威音王已後無師自悟盡是天然外道」。

⑤佛教大系「正法眼藏」第一の六頁。又一六頁に云ふ。「佛法を住持せし、諸祖ならびに諸佛、ともに自受用三昧に端坐依行するを、その開語のまさしきみちとせり、西天東地さとりをえし人、その風にしたがへり、これ師資ひそかに妙術を正傳し、眞訣を稟持せしによりてなり」。

⑥「語錄」二—三丁。

⑦ Schleiermacher, Ueber die Religion, s.130

- ⑧ Durkheim, *Les règles de la méthode sociologique. Pélage de la second édition*, III, et, *ibid.* P.6
- ⑨ *ibid.*, P.150. この問題に就て若干附記して置きたいことがある。タルドはデュルケームと相容れない學說を有する。後者は、個人が社會的なものを受容れるのは社會の威壓即ち強制に基くとなし、前者は個人の社會への自發的な應化に基くとなしてゐる。タルドは云ふ。「社會的實在は、それが一度構成された曉には、極めて稀な場合として個人に強制的に作用することもあるが、大體多くの場合に於て、納得とか暗示とか、特異の満足とかに依て個人に受容られることは極めて明瞭である。」(風早八十二譯、「タルドの社會學原理」、一八九頁)彼のこの見解はデュルケームの見解と對立するものであつて、前者は個人本位的立場に立ち後者は社會本位的な立場に立つものである。而て、デュルケームの態度は、コントの正統的思想の上に立つものである。即ちコントは云ふ。「靜的關係に於ても動的方面に於ても、本來的に云へば、個人は事實純粹な抽象にすぎない。人類のみが、特に知的道德的組織に於ては實在するものである。」(Comte, *Cours de philosophie positive*, II, Paris) 斯の如きコント・デュルケーム的な立場とタルド的な立場の中、何れが正しいかと云ふことに就て論議することは、雌鳥が先きか卵が先きかに就て論議すると同様に、はてしのないことではあるが、私は自己を個人的存在として觀る場合、その個人的存在たる私は幾多の人的因縁に依て存在せしめられてゐることを認識す

るので、結局はコント・デュルケーム的立場に左袒するものである。然し、社會的なものが威力を發揮するがためには、社會的なものに對する個人の意識が必須的なものであることは認めねばならない。何者白痴には如何なる威力も威力ではないからである。

- ⑩ Comte, *ibid*, P.381
- ⑪ Schleiermacher, *ibid*, S.41
- ⑫ Troeltsch, *Gesammelte Schriften*, I, S. 320—321
- ⑬ Ross, *Social Control*, P. 397